

## 2020年8月16日 説教「信仰に基づく志」

### 創世記 41章 14～36節

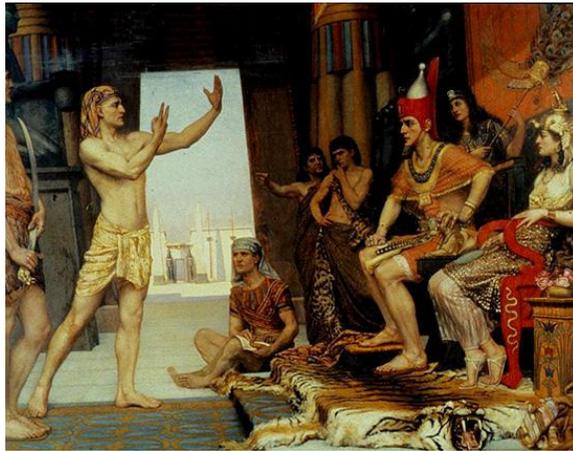
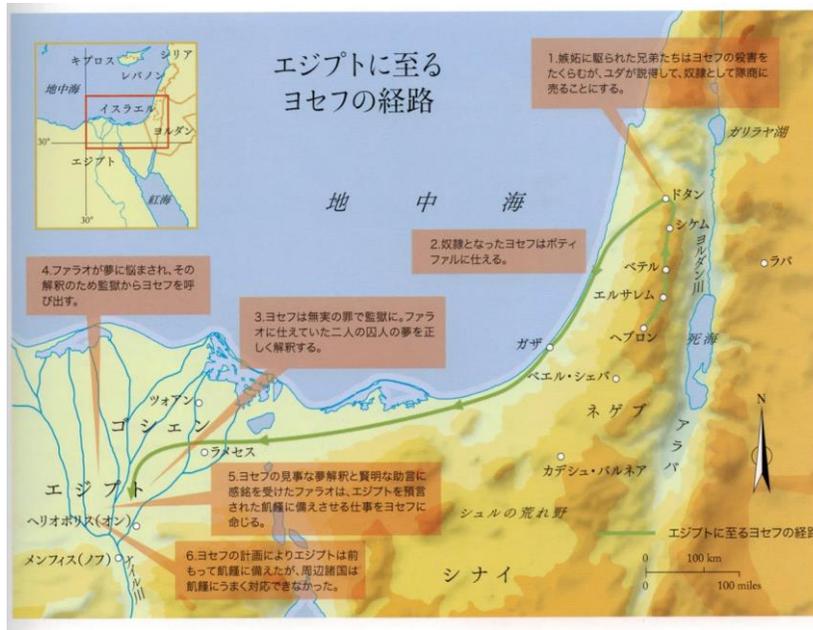
パロは夢を見たのです。その意味について、誰も解き明かすことができません。その時、献酌官長はヨセフのことを思い出したのです。

#### 1. パロの前に出て (14～16節)

- ①パロの呼び出し (14) 「そこで、パロは使いをやってヨセフを呼び寄せたので、人々は急いで彼を地下牢から連れ出した。彼はひげをそり、着物を着替えてから、パロの前に出た。」ここにヨセフのいた監獄が地下牢だったということがわかります。パロはヨセフを王宮へと呼び寄せます。ヨセフがひげをそり、着替えたという、身だしなみの記事は興味深いです。彼は連れ出されるにあたり威儀を正したのです。
- ②パロの問いかけ (15) 「パロはヨセフに言った。『私は夢を見たが、それを解き明かす者がいない。あなたについて言われていることを聞いた。あなたは夢を聞いて、それを解き明かすということだが。』」パロは自らの見た夢について、呪法師や知恵者を集めて、その意味をたずねても、誰も説きあかせなかったことを述べ、ヨセフが自らの夢を解いてくれると期待をかけて、問いかけるのでした。
- ③神がパロの繁栄を (16) 「ヨセフはパロに答えて言った。『私ではありません。神がパロの繁栄を知らせてくださるのです。』」ヨセフは、夢の解き明かしをするのは、自分ではなく、神であることを明言しました。ここに、ヨセフの真骨頂でありましょう。

#### 2. パロの二つの夢 (17～24節)

- ①夢の内容(17～20) 「それでパロはヨセフに話した。『夢の中で、私はナイルの岸に立っていた。見ると、ナイルから、肉づきが良くて、つやつやとした七頭の雌牛が上がって来て、葦の中で草を食べていた。すると、そのあとから、弱々しい、非常に醜いやせ細った他の七頭の雌牛が上がって来た。私はこのように醜いのをエジプト全土でまだ見たことがない。そして、このやせた醜い雌牛が、先の肥えた七頭の雌牛を食い尽くした。』」パロが見た夢がヨセフに伝えられます。つまり、七頭の肥えた雌牛と七頭のやせ細った雌牛についての夢です。
- ②その姿は醜く (21) 「ところが、彼らを腹に入れても、腹に入ったのがわからないほどその姿は初めと同じように醜かった。その時、私は目が覚めた」ここは新しい情報ですが、太ってつやのある雌牛を食べたにもかかわらず、醜い雌牛たちの姿は変わっていなかったのです。醜い雌牛は食べても、肌につやは生まれなかったのです。
- ③もう一つの夢 (22～24) 「ついで、夢の中で私は見た。見ると、一本の茎によく実った七つの穂が出て来た。すると、そのあとから東風に焼けた。しなびた貧弱な七つの穂が出て来た。そのしなびた穂が、あの七つの良い穂を飲み込んでしまった。そこで私は呪術師に話したが、誰も私に説明できる者はいなかった。」この部分の夢もすでに



語られたことです。七つの豊かな実を实らせた穂と東風に焼けたしなびた穂の夢。こちらについても、誰も解き明かしできなかったというのです。

### 3. ヨセフによるパロの夢の解き明かし (25～36 節)

①七年のこと (25～27)「ヨセフはパロに言った、『パロの夢は一つです。神がなさろうとすることをパロに示されたのです。七頭の立派な雌牛は七年のことで、七つの立派な穂も七年のことで、それは一つの夢だったのです。そのあとから上がってきた七頭のやせた醜い雌牛は七年のことで、東風に焼けたしなびた七つの穂もそうです。それはききんの七年です。』するとヨセフは全くためらうことなく、解き明かしを始めました。パロの見た二つの夢は、一つのことを表しています。七頭の立派な雌牛と七つの立派な穂は七年の豊作を意味し、七頭の醜い雌牛と七つのしなびた穂も、七年のことで、七年の飢饉が来るという意味ですと、解き明かしたのです。

②豊作と飢饉 (28～32)「これは、私がパロに申し上げた通り、神がなさろうとすることをパロに示されたのです。いますぐ、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れます。それから、その後、七年間の飢饉が起こり、エジプトの地の豊作はみな忘れられます。飢饉が地を荒れさせ、この地の豊作は後に来る飢饉のため、跡もわからなくなります。その飢饉は、非常に厳しいからです。夢が二度パロに繰り返されたのは、このことが神によって定められ、神がすみやかにこれをなさるからです。」ヨセフは七年間の大豊作があった後に、七年間の大飢饉がくるというパロの夢の意味を伝えます。二度にもわたって夢を見たのは、起ころうとすることが神の定めであり、時を移さず、この厳かな出来事が現実化するということも伝えました。

③さとくて知恵のある人を (33～36)「それゆえ、今、パロは、さとくて知恵のある人を見つけ、その者をエジプトの国の上に置かれますように。パロは、国中に監督官を任命するよう行動を起こされ、豊作の七年間に、エジプトの地に、備えをなさいますように。彼らにこれか

らの豊作の年のすべての食糧を集めさせ、パロの権威のもとに、町々に穀物をたくわえ、保管させるためです。その食糧は、エジプトの国に起こる七年の飢饉のための、国のたくわえとなさいますように。こ

った穀物を倉庫に備蓄させるのです。そうすれば、七年が経ち、飢饉が襲ってきても、食糧が倉庫にあるので、エジプトの国の民は飢えから守られ、滅びないと説明したのです。

### 《結論》

ウィリアム・クラーク博士は 1876 年 7 月から約 10 か月、札幌農学校 (現北海道大学) の開校に尽くした人です。クラークはここで学ぶ人には「イエスを信ずる者の契約」が誓約をし、信仰に基づく教育をするという基本路線を敷きました。帰国時に、クラーク博士は見送る学生達に「少年よ。大志を抱け」と言って馬で去って行ったといわれます。実際は、Boys, be ambitious in Christ! (キリストにあって大志を抱け) と言ったともいわれています。大志と野心とは異なります。大志は自分の栄誉や利益を度外視したところがあります。しかし、野心には自分の利益や栄達といったものが目的であると言えますか。

それでは、ヨセフには野心があったのでしょうか。つまり、夢の解き明かしをした後に、彼はパロに「さとくて知恵ある人を見つけ、その者をエジプトの国の上に置かれますように」と勧めています。自分こそがその役割に相応しいといった思いがあったのでしょうか。結論をいえば、野心はなかったと思われま。なぜならば、彼はパロの前に出て、夢の解き明かしの力について問われた時に「私ではありません。神がパロの繁栄を知らせてくださるのです」(16 節)と述べていて、解き明かしの一切は神によるのだという宣明しています。それに、ヨセフはパロから夢の内容を、その場所で知らされ、瞬時に主なる神から教えられて、解き明かしをしたのですから、野心を持つ間もなかったのです。ヨセフの心の内にあったのは、七年の大豊作に続く七年の大試練のことでした。賢く対応しなければ、エジプトの国の経済やや社会や民の生活は大変なことになり、その事態を乗り切るためには、賢い舵取りができるリーダーが必要だと、彼は導かれるままに、意見を伝えたのです。

ヨセフは獄中にあっても、王の前に立っても、その基本姿勢が神への信仰であったことに注目しましょう。父ヤコブや祖父イサク、さらには曾祖父アブラハムから受け継ぎ、教えられた人生の基本は、どんなことがあっても神との契約を大切にし、神信仰に生きることでした。兄弟達の中にあっても、ヨセフはそれを受け継いでいました。兄達に疎まれ、邪見にされて、売られたヨセフが、外国の地にあっても神への信仰を持ち続けていました。ヨセフにも欠点や弱さはありませんでしたが、家族から離され、獄中に入るという試練の中にあっても、逆にその信仰は強められていったと理解できます。宣教師は外国の地にあっても、主に頼るしかなくなるという言葉が聞きましたが、外国の地にあり、孤独な中で、ヨセフは霊的に育てられていったのです。「信仰は望んでいる事がらを確認し、見

えない事実を確認することです」(新共同訳ヘブル書 11:1)。ヨセフは主が必ず事をなしてくださり、相応しく導いてくださると信じ、主に従っていったのです。その信仰に基づく、純粋な一貫とした志が、この後にエジプト王パロの目に留まったのだと考えられます。私たちも、ヨセフの信仰の志に教えられて、キリストの福音に立ちつつ、希望をもって歩んでいきましょう。